OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	”コミュニティ”としてのラジオスタジオ ： 京都放送『早川一光のばんざい人間』を事例として
Author(s)	北出, 真紀恵
Citation	年報人間科学. 2003, 24-2, p. 269-287
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9584
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

“コミュニティ”としてのラジオスタジオ

――京都放送『早川一光のばんざい人間』を事例として――

北出 真紀恵

〈要旨〉

本稿では、京都放送の『早川一光のばんざい人間』を事例としてとりあげ、ローカルラジオにおける“対話の広場”になりうる可能性を検討する。

この事例研究は、筆者の、番組スタート時からの出演者としての経験知を参考にしたものである。

地域の臨床医・早川一光をパーソナリティとする『早川一光のばんざい人間』が特異なのは、毎週約四十人の聴取者がスタジオでの生放送に参加し、そこでは、コミュニティが形成されている点である。

番組は、最初から参加型番組として企図されたのではなく、講演での早川の活発な語りをシンボライズさせようとした演出策が、意図せざる結果として、現在の姿へ導くこととなった。

早川は医療においても、ラジオにおいても「住民参加」を主張し、聴取者参加型番組は彼の考え方を反映したものとなっている。

８０才を迎え、早川は白衣を脱いだ。彼の「八十才の医療」とは、「患者の声に耳をすまし、そして対話すること」である。今、彼の医療と彼のラジオは、これまで以上にひびきあう。

『早川一光のばんざい人間』はいくつかの問題点を抱えているが、それでもなお「住民参加」にこだわる老医師・早川に掘り起こされたのは、ラジオにおける“対話の広場”となりうる可能性なのではないだろうか。

キーワード
ラジオ
コミュニティ
医療
住民参加
“対話の広場”

「ラジオは不特定多数。でも、そもそも、ラジオは住民参加が本当だと思ってる。医療にも住民参加する。堀川病院でも、みんなが出資して医者の病院ではなく住民の病院を作った。ラジオも住民参加が本当[1]。」

0. ラジオは地域に何ができるか？

ラジオは、地域に何をしてきたのか？

戦後日本のラジオは、ローカルメディアとしての特性を最大限に生かすことを模索してきた。各地域でラジオパーソナリティを中心とした生・ワイド番組が地道に日々の放送を続け、災害報道などにおける活躍などで、生活情報を供給するというラジオのローカルメディアとしての機能は、一定の成果をおさめたといってもいいであろう。

しかし、ラジオをめぐる状況は決して楽観的なものばかりではない。若者のラジオ離れや、長引く不況による広告費の減少といった産業的な行き詰まりなど、ラジオはまた、危機的な状況にあるともいえる。これまでのラジオのありようを超えて、ラジオは今、変革をせまられていると言えるだろう。

結論を先取り的に述べるなら、ラジオのメディア特性を考えた時、これからのラジオに期待されているのは、何よりも他メディアとの連携を含む「双方向性」であり、「対話性」であり、「広場」的なコミュニケーションであると考える（北出、2002a p354, 2002b p143）。

本稿では、筆者自身が、番組開始時からレギュラー出演者として携わっている京都放送のローカルラジオ放送『早川一光のばんざい人間』を事例としてとりあげ、ローカルメディアであるラジオの“対話の広場”となりうる機能、そして、コミュニティを形成しうる機能にむけた可能性の提示とし、ラジオにおける市民のための“対話の広場”としての可能性について考察する。

1. ラジオをめぐる状況

まずは、事例とした番組を説明する前に、現在のラジオをめぐる状況と、ラジオへの期待をみておくことにしたい。

1－1 ラジオのマンネリズムと聴取者の高齢化

ラジオの衰退が叫ばれだして久しい。確かにラジオは、阪神淡路大震災時など災害時においては、災害報道で一定の成果をあげ、また、こまかな地域情報を機動力を生かして伝えるメディアとしての有用性を人々に改めて確認されることになった。

藤久ミネは、それを、七十年代から、地域ステーションとしてのメディア特性を生かし、地域生活に密着した生活情報局として、それぞれの局が生ワイド番組を通し、地道な活動を行ってきたことの

蓄積が災害報道で生きたのだと指摘している（藤久、1999 p182-184）。

震災報道は、日常の放送活動の延長線上にあったからこそ、地域生活に密着した報道として機能したのだ。その意味で、テレビ誕生後の一九六十年代に「ラジオ・ルネッサンス」として、全国の民放各局がとってきた、ラジオパーソナリティを中心とする生・ワイド番組を編成の中核とする方策は、成果をあげているといってもいいだろう。

だが、その一方で、災害時におけるラジオの有用性は確かだが、ふだんのラジオはつまらないという声も少なくはない。その原因のひとつとして藤久は、ラジオでは一般化しているセグメンテーション編成をあげている。聴取者を細分化し、顧客の好みに合わせて番組を作る方式の一般化は、送り手の側が訴えたい問題提起を企画し番組化するのではなく、受けての好みを先回りして察知し、それに合わせてせいぜいリクエストのハガキ程度の内容をもりこむもので、わかりやすく親しみやすいというだけの理由でごく瑣末な情報ばかりまき散らすのでは、ラジオのステイタスを下落させることになるというのである（藤久、1990 p30-32 1999 p184-185）。

また、ラジオ衰退の原因のひとつとして、「若年層のラジオ離れ」がある。かつて、ラジオは若年層のメディアであった。

中野収は、深夜放送に集まった仲間は、現在、深夜放送当時の集合形態を「祖型」として、「電話のさまざまな転用が結びつけた“仲間”、インターネット上というか、内というか、そこにできている同好の“仲間”たちで集まり『ゲームないしは遊びであるコミュニケーション』に興じている」と述べている（中野、1997 p141-143）。かつてラジオに集まった若者は、今、ネット上に集まっているのだ。そして、若年層聴取者の減少がそのまま、ラジオ聴取人口全体の減少につながっている。

その一方で注目されているのが、中高年層とラジオの関係である。NHKの『ラジオ深夜便』は、民放のオーディエンスセグメンテーションと逆行するかたち、つまり、聴取者層を年齢で限定しない方針がとられたが、結果として高齢層をひきつけることとなった（藤久、1999 p176-182）。

また、香取淳子は、高齢者の情報行動の研究で、高齢者は電波メディアを好むということを明らかにし、その理由を同時性や速報性ではなく、話し言葉で伝達されるしくみにあるのではないかと述べ、消費者としての若年層を重視するあまり、消費者として軽視されている高齢者を排除してしまう構造から、産業としてのメディアが若年層中心の番組制作から脱却できないでいる現状を指摘している（香取、2000 p203-205 p315）。高齢者が楽しめる番組が少ないのだ。

しかし、人口構造の変化に対応し、市場も、そして、メディアも、今や中高年層の存在に配慮せざるをえない時代に突入している。現在の中高年層は、かつて深夜放送に集まった若者たちであり、ラジオ聴取習慣のある世代である。そのような文脈で盛んに語られだしたのが「ラジオは、中高年のメディア[2]」論であるが、聴取率調査にはいまだ六十才以上のサンプルがはいらないなど、その対応はた

ちおくれているのが現状である。

1－2　ラジオへの期待

テレビの登場により、ラジオは、一九七一年の民放連による「コミュニティ・ステーションラジオ構想」を初めとして、ローカルメディアとして生きる道を選び、その特性を最大限に生かすことを模索してきた。「構想」で提案されていたのは「コミュニティの内と外に絶え間なく生まれる事件や話題を、つねに地域に根ざした視点からキャッチしていく“生活レーダー”としての機能」と、「コミュニティの人々にマイクを解放し、人々の間の対話を活性化していく“対話の広場”としての機能」を持つべきだとの主張であった（藤久、1990 p32-35）。

「コミュニティ」というのはマッキーヴァーによって提出された概念である。「コミュニティ」は自発的に人々の生活の中からうみだされていくものであり、生活が行われるその地域で地域性と共同の感情がなければならないとされている（マッキーヴァー、1917＝1975 p47）。清原慶子は、産業化の進展と都市化の拡大で、日本の伝統的ムラ社会が崩壊し近隣的結合の弱い状態へと地域社会が変化したことをあげ、マス・メディアが画一的な都市的ライフスタイルの普及に大きく貢献したことを認めたうえで、地域メディアがコミュニティ形成の機能をはたしうる可能性があることを示唆している（清原、1983 p126-132）。

また、林香里は、ラジオが欧州各国で市民のためのメディアとなる可能性を秘めるものとして注目され、ドイツで「参加する公共圏」を再生しようとする実験が一部ではあるが進行中であると述べ、メディアとしてのローカルラジオの可能性を検討している（林、1996 p170-172）。

ラジオに期待されているのは、こまわりがきき、地域に密着した情報を提供し、地域住民が参加できるメディアとしての可能性なのである。

2．京都放送ラジオ『早川一光のばんざい人間』を事例として

ここでは、ローカルメディアの「“対話の広場”としての機能」「コミュニティ形成の機能」を考えるうえで、一つの事例として、あるローカルラジオ番組のとりくみをとりあげ、その可能性について考察してみたい。

事例としてとりあげるのは、京都放送ラジオ『早川一光のばんざい人間』という生・ワイド番組であり、その際、筆者の、一九八七年の番組スタート時からの出演者としての経験知を大いに参考とした。

放送日時は、毎週土曜日午前六時十五分～八時十五分で、出演はメインパーソナリティが早川一光、アシスタントとして女性アナウンサー（筆者）の2名である。スタッフとしては、ディレクター1名、ミキサー1名、構成作家1名、そしてアシスタントディレクタ

ーが1名。生放送中にかかってくる電話に対応するオペレーターが2名であり、ラジオスタッフとしては最小の人員である。生・ワイド番組としては一般的な構成であるのだが、この番組を事例としてとりあげるのは、全国的にみて特異な形態をとっているからである。特異な点とは、『早川一光のばんざい人間』は、放送局内にあるラジオスタジオを聴取者に一般公開し、だれでも、いつからでも、番組に参加できることにある。

二〇〇二年現在、スタジオに参加しているのは、季節や天候などに左右されるが、毎回四十人前後であり、その光景は、まるで近所の茶話会のような気楽さである。生放送であることの緊張感はそこにはない。このような聴取者参加型番組は他に例はなく、一九九九年には日本民間放送連盟賞のワイド番組部門で優秀賞を、そして日本放送批評家懇談会ギャラクシー賞の優秀賞を受賞している。地域公開型という番組内容が高く評価されたのである。

しかし、『早川一光のばんざい人間』は、当初からこのような聴取者スタジオ参加型番組を企図していたわけではない。このような番組形態になるまでには、番組を作りあげていくうえでのスタッフの試行錯誤があったのであり、十数年の時間が必要であった。

では、地域の臨床医である早川がラジオパーソナリティになる背景と、ラジオ番組『早川一光のばんざい人間』の現在までの歩みをたどってみることにしたい。

2-1 「医師のラジオパーソナリティ」誕生の背景

メインパーソナリティ早川一光は医師である。まず、彼の経歴を紹介することにしよう。

愛知県出身で、京都府立医科大学を卒業した早川は、二〇〇二年現在、七九才の臨床医である。かつて国民皆保険運動や、住民出資の診療所設立運動の先頭に立っていた早川は、一九五〇年、京都西陣に住民出資の白峰診療所を創設した。以後、診療所は総合病院である堀川病院へと発展し、早川は院長、理事長を歴任することになった。在任中もあくまでも「患者の家が病室、道が病院の廊下、街が村が診療所・病院であり、病院は医者の詰め所」の考え方を貫き、往診かばんをかかえての「わらじばきの医療」を続けたことで「京のわらじ医者」として知られる地域の有名人でもある。

そして、一九九〇年代の後半からは、茅葺きの里として知られる京都府美山町で「もう一度、住民の手による病院を」と診療所設立に加わり、一九九八年三月から設立された美山診療所所長をつとめることになる。京都府北部の山間部にある美山町では、もともと土地の医師が一人で医療を引き受けてきたのだが、体調を崩し、診療所を閉鎖することなった。人口五千六百人の美山町が無医村になってしまう。美山町の町長や役所の人々にこわれ、診療所設立に携わることになった早川は、京都市内の自宅から鯖街道を通り抜け、京都府北部の美山町に通い、七年かけて農村医療の礎を築いた。二〇〇二年五月、八十才を目前にした彼は美山診療所所長を退職した。

そして、八十才になろうとする今は、自宅で「このような病状な

らどこにかかればいいのか」「このような症状だが、医者にかかった方がいいのか」などの医療に関する相談を聴く「わらじ医者よろず相談所」を開設し、無料で電話相談を受けながら、全国各地を講演でとびまわる日々である。

医師・早川と、ラジオとの出会いはいつだったのか。

早川と京都放送ラジオの縁は、一九七八年にさかのぼる。

『シティ・ナウ』という昼間の生・ワイド番組のなかに地域密着型の相談コーナーがあり、「お年寄り何でも相談」というコーナーの相談者として出演したのがきっかけであった。当時は早川も五十三才と現役世代で、堀川病院の院長職にもあり、また、新聞でコラムを執筆するなどすでに地域の「文化人」のひとりであった。

個性的な声とその語り口から、当時の担当ディレクター高田正人は、「いつかチャンスがあれば、（メインパーソナリティとして）かつごう[3]。」と機を狙っていたという。

民間放送連盟の『民間放送30年史』によれば、ラジオにおけるパーソナリティ番組の普及は、中村鋭一の登場をその契機とし、「ラジオパーソナリティは、DJでもなく、放送記者でもなく、司会者でもない。彼は『おはようパーソナリティ』と呼ばれる放送活動の主体であり、彼こそが番組、いいかえれば“媒体”そのものとなっているのである。つまり、四十年代のラジオは、生ワイド化とともにモノ（企画）中心からヒト（中心）へと、ラジオの方向が移行し、独自なラジオの世界を切り開くこととなった。（日本民間放送連盟、1981 p210）」と宣言されている。

以後、ラジオは、だれがラジオパーソナリティをつとめるかがその命運を握ることになった。

ラジオ各局が、当時も、そして今も、独自のラジオパーソナリティを発掘し、育てることに奔走するのは無理もない。

独自のラジオパーソナリティをみつけようという動きの中、放送のプロフェッションではない人材をラジオ番組のメインパーソナリティに登用する動きが、地方各局ですすんでいた。ラジオの生・ワイド化は一九七〇年代を通じて全国に広まり、かつ「ラジオパーソナリティ」と呼ばれる放送活動の主宰者が、その番組の中心となる様式が一般化する。

かつて、マクルーハンが述べたように、テレビの普及と同時に、ラジオは、「地方的地域共同体」をヴァーチャルな空間に作り、ラジオパーソナリティは、それぞれの「部族」の「祭司」であり（マクルーハン、1964＝1987 p308-319）、「カリスマ（郡司、1998）」として存在する。

タレントの供給の多い首都圏はともかくとして、地方放送局にとっては、「パーソナリティ」として、どのような人材を登用するかは生命線でもあった。多くは、売り出し中のタレントの登用であったり、またその地域のタレントや社員アナウンサーのスター化が試みられた。そのようななか、「放送以外の分野で活躍している人材」の登用が模索されるようになる。問題となるメディア・プロフェッションでないパーソナリティの放送進行については、「アシスタント」役割の出演者にその機能を負わせることにより、進行を成立させる

ようになった。ワイド番組において一般的であった「パーソナリティ」と「アシスタント」の関係を、「主」と「従」ではなく、機能分業させることによって、メディア・プロフェッション以外の人材による「ラジオパーソナリティ」が成立したのである[4]。

ディレクターの高田は、「しゃべりのプロではない人材」のほうが「番組をつくっていくうえで、出演者と制作者が対等な緊張関係を保てる。新しいスタイルを作っていくためには地域の素人がのぞましい[5]。」と述べている。

一九八七年十月三日、医師の生・ワイド番組ラジオパーソナリティが、京都で誕生した。

番組を担当するにあたって、早川は次のように述べている。

「テレビと違ってラジオは耳で聴き考えるので老化防止になる。ラジオを見直したい。ラジオの身軽さで、エコーするようにみんなでつくりたい。素人の臨床医がやるのだから、危険だけど、素人のよさを最大限いかしたい。(早川、1987「京都新聞」)」

2-2 放送初期

土曜日の早朝の生・ワイドの時間帯は、ラジオのゴールデンタイムのひとつでもある。

「時期尚早」「年寄りはイメージが暗い」「高齢者ターゲットなど箱番組で十分」「スポンサーがつかない」などの局内での反対をおしきり、番組は、従来の生・ワイド・パーソナリティ番組の様式でスタートした。

ラジオパーソナリティに若い女性アナウンサー(筆者、当時)がアシスタントとしてつき、スタジオで向かい合って話す二人の会話を中心に番組は進行し、「おじいちゃんが、孫娘に語るような」演出がなされ、高齢者でも、聞き易いように「ゆっくりしゃべる」「ゆったりとした音楽」に留意し、ラジオ聴取習慣のある中高年層が「帰れるラジオ」としての配慮がなされた。

民放のセグメンテーション編成から排除された高齢者をターゲットとしたのは、民放初の試みであり、また、六十代という高齢者メインパーソナリティというのも当時としては異例であった。もちろん、現在も生・ワイド番組のパーソナリティとしては、最高齢を更新中である。

2-3 聴取者参加型番組へ

『早川一光のばんざい人間』は、医療や、高齢者をはじめとする社会的弱者の問題に焦点があてられている以外は、一般の生・ワイド番組の構成で放送が続けられた。放送開始から四年がたとうとしていた。

聴取者の見えないラジオスタジオからの早川の「語り」と、多くの聴衆を目の前にする講演会での早川の「語り」の乖離は、早くから番組スタッフの間で問題視されていた。講演会では舞台をところ狭しと動き回る早川が、スタジオでのトークとなると急に静かにな

るのだ。どうしたらいいのだろうか。スタッフの会議は続いた。

一九九一年夏のことであった。「実際に目の前に聴取者にいてもらったらどうだろうか」と、最初は、スタッフが放送当日、局近辺で散歩している人にお願いしてスタジオに見学に来てもらったところ、その、ほんの数人のオーディエンスに早川は反応したのである。そして、この、あくまでも早川の「語り」の調子をあげるための苦肉の策が、現在の聴取者参加へとつながっていくこととなる。

一九九一年十月になり、新コーナー「びっくり仰天講座」がスタートした。寺で早朝行われる「仰天講座」をもじって名付けられた講座の受講生として、番組は、正式にスタジオに早川の話を聴きに来る聴取者の募集を始めた。

最初は、数人の受講生しか集まらず、「今からでもスタジオにいらっしゃいませんか」と放送で数度よびかけ、早川自身が往診先の患者や近所の人を誘ったり、講演先で募集したり、聴取者が友人を誘うなどして、徐々に参加者が増えていった。

当初、早川は「びっくり仰天講座」のコーナーの時間のみ、参加者にむかって立って語っていたのが、参加者が増加するにつれ、生放送中ずっとマイクをもってスタンディングで語るようになる。

放送中、出演者の二人は向かい合わず、早川は参加者に向かって語り、女性アナウンサー（筆者）は早川の後方から語るかたちとなった。

早川は二時間の生放送中、スタジオ内を動きまわり、椅子に座ることはない。健康をチェックする「あなたの健康チェックアンドチェック」のコーナーでは、早川は自ら持参した白衣をまとい、聴診器とマイクを持ち、ラジオで語りかける。また、放送時間中、電話、ファックス、メールでの医療相談および呆け相談を受け付け、それらに答えることで、医師としての早川の持ち味が発揮されている。スタジオには、四十人前後の聴取者が自由参加しているが、放送番組に参加するというより、それぞれ菓子などをもちより、早朝の茶話会といったふうである。番組の演出としても、ニュースあとのコメント、意識調査を行う「いきいきシニア白書」での意見、小学生の作文朗読に対する感想を始め、番組によせられた相談に早川とともに答えるなど、番組随所で、参加者の発言の機会が設けられるようになった。

『早川一光のばんざい人間』は、今では、スタジオ参加者なしには成立しない番組構成となっている。

スタジオの参加者に話を聞いてみた。

「平成三年の十月十二日から来ています。母が早川先生に往診してもらってました。お医者さんの話が聞きたいと思って。早川先生の話も昔から聞いていて、『ぼけ老人をかかえる家族の会[6]』を手伝ったりしていました。一回きたら、ぬけられへん、なんか、おいていかれそうで。何がきっかけかというと、『百まで生きよう会』というサークルのメンバーに誘われたのがきっかけ。宮内さん（参加者）、向川さん（参加者）たちとカラオケサークルも作っ

てます。千円のカラオケ喫茶にみんなで行ってます。ここで、たくさんお友達ができました。朝早いのはかまいません。というより、この時間やから、出てきやすい。

（秋津千津子さん、六五才）[7]」

ラジオが好きというより、ラジオスタジオでの集まりに参加しているケースである。ラジオスタジオで知り合った人たちと、新たな人間関係を形成し、スタジオの外でもその人間関係を楽しんでいる。このように、ラジオスタジオの中では、気の合う人同士のいくつかのグループが形成されているのが見受けられる。

「平成五年から。もともとKBSをずっと聴いていました。手仕事をしていたので、ずっとKBS。子どもの時からKBSです。前の『おはようサンシャイン』という番組でたまにスタジオに見学に来てました。ディレクターが同じ人。番組参加は、息子の嫁が堀川病院につとめてたから。テレビは見ません。なんでかというと、言葉遣いとかが気になる。こんなしょうもない人に高いお金払ってと思うと腹たつし。勉強になる話が好きです。楽しいです。西村先生（京大・医療経済学）や玉川先生（京都栄養士会）の話が好きです。番組で知り合ったお友達と、お芝居にいったりコンサートにいったりしています。一週間に一回というところが苦にならない。

（中村ふみさん、七七才、一人暮らし）[8]」

中村さんは、古くからのKBSの聴取者である。KBS京都は、一九五一年十二月二四日開局の、日本で四番目に古い民間放送局でもある。「ずっとKBS」ということばにあるように、ラジオが茶の間に置かれていたラジオ黄金時代を知る世代にとっては、地元の放送局は親近感のある存在なのであろう。地域の放送の聴取者が、公開という開かれたスタジオにも遊びに来ている例である。これらのひとびとは『早川一光のばんざい人間』だけではなく、他のワイド番組もくまなく聴取し、放送局が行うイベントには必ず参加している。

「早川先生とは古いんです。近所でね。先生に誘われて来ています。一時中断してたんですけどね。ボランティアやってましてね。一息ついたんで、また、これからがんばって来させてもらお思って。ラジオももともと聴いてました。まあ、なんかやってなあきませんわ。苦になりませんわ。バラエティに富んだ番組ですしね。第一、先生と北出さんのやりとりね、それから先生のキャラクターの強いとこ。先生らしくないとこですなあ。派手にしゃべりはりまっしゃろ。（宮内正太郎さん、八四才）[9]」

早川が自ら連れて来て定着した例である。もちろん、地元局のKBSに対する親近感も強い。このように、早川や参加者が、友人や家族などをあらたな参加者として誘ってくる例はめずらしくない。

他には、介助に行った先で知って参加するようになったホームヘルパーや、介護者がレクリエーションで高齢者や障害者を連れてくる例も多くみられる。

「今日、初めて来ました。いっぺん、来たい来たいと思ってました。大阪の東大阪からです。車で。いつもは朝日放送聴いてます。ずっと、道上さん（朝日放送ラジオの『おはようパーソナリティ道上洋三です』のパーソナリティ、道上洋三のこと）。土曜日だけKBS。たまたまダイヤルあわせてたら、『ぼけない音頭』が流れて、こらおもろいな思って。ここ一年ぐらいずっと『ばんざい人間』聴いてます。店があるので、なかなか出られへんのですけど、今日はたまたま。おもしろかったです。また、来たいです。

（渋谷三郎さん、六二才）[10]」

たまたまラジオを聞いていて番組を聴くようになり、放送で流れるスタジオの雰囲気を一度体験してみたいと、参加する例である。潜在的には「一度、行ってみたい」と思っている聴取者が多く存在する事が考えられる。普段は仕事があり、一年に一度休みになる年末年始のみスタジオ参加する人など、時間的に可能なら、いつでも参加したいと思いつつ、ラジオを楽しむ聴取者が多数存在する。

スタジオは、いつからでも、だれでも参加できることにしており、放送途中からの参加も可能であり、また、早退も可能である。なかには、スタジオでの集まりのみが目当てなのか、放送終了間際に駆け込む人もいる。

常連の参加者に関しては、地域近隣の住人がおもであるが、大阪在住で放送日のために京都に宿泊して参加する七十代の女性や、和歌山県から自動車で来る四十代の夫婦もいる。また、番組の地域のシニアを紹介する「みんな元気」というコーナーで、ゲストとして出演した人がそのまま常連参加者になるケースも複数みられた。年齢は六十代から七十代が中心であるが、最近では、福祉の現場で働く若い世代、リストラされて元気がもらいたいという熟年世代の参加者もみられるようになった。男女比はやや女性のほうが多い。

ちなみに、スタジオ内でのパイプ椅子をならべるなどの準備、お茶だし、後かたづけは、すべて参加者によって行われている。

これまでにスタジオに参加した人数は五六十人を超えた。（二〇〇二年十一月現在）

スタジオの中で、ある種のコミュニティが形成されているため、番組内容がスタジオ内で閉じないように、寄せられた電話やファックス、メールにはすべて答える方針をとっており、生放送内で時間的に紹介できなかったり、または、放送するには病状が深刻な場合は、早川が放送後、連絡をとっている。「先生から電話かかってきた」「先生からファックスが」という驚きの声が番組に多数寄せられている。また、二〇〇二年六月に早川が自宅で開設した「わらじ医者よろず相談所」は、まさに、これまでラジオで行っていた電話相談を拡大したものでもあり、番組と連動するかたちで様々な相談を受け付けている。

早川にラジオについての考えを聞いてみると、次のようなものであった。

「長く臨床をやっていると、ひとをなおすのは臓物をなおすことだけでないと思った。もちろん、病気をなおすのは医者の第一義ですけど。ものの考え方というかな、たとえば、お財布あけて千円しかないと考えるか、千円もあると考えるか、そのものの考え方を変える方法のひとつとして、マスメディアがある。一つは講演、テレビ、そして出版。いろんな方法でね、ボケを解説するんじゃなくて、ぼけたっていいんじゃないのっていうものの考え方を、人様の考え方を変えていきたいというのが、ここ二十年のぼくのスタイル。たまたま、KBSがぼくをほりだして、ここへほうりこんでくれた。それで、十四年続けてる。ぼく、これだけじゃありませんしね、タレントじゃありませんしね。ぼくは、泳がされている。ぼくを泳がせてんですよ、上手にね。おだてて上手にわしをつこうてる。のせられて。引っぱり出して引っぱり出して、そのタイミングがぴたりとおうてるから聴く側は違和感がない。ぼくの性格よくご存知でね、泳がせてる。ラジオは不特定多数。でも、そもそも、ラジオは住民参加するのが本当だと思ってる。医療にも住民参加する。堀川病院でも、みんなが出資して、医者の病院ではなく住民の病院を作った。ラジオも住民参加が本当。ここも、ぼくの総合人間研究所のフィールドのひとつ。スタジオ参加のみなさんが変わっていくのが楽しみ。それも医療なんだ[11]。」

3.「(八十才)でこその医療」

早川は、「ラジオは住民参加が本当のすがた。医療も住民参加。」そして、「スタジオ参加の皆さんが変わっていくのも治療なのだ」という。

八十才になろうとしている今も、形は変われど、医師であり続けようとする早川を、妻の早川ゆきさんは次のように述べている。

「私は夫を医師という感覚でみたことはありません。あくまで医療運動家です。夫は自分の医師としての職業を通じて、患者さん主体の医療にするには、どうしたら良いかを常に考えている人です。

自分の体は自分で守る、自分の暮らしは自分で守るをモットーにした考え方を、患者さんと共に育てていく。それを核にして運動を進めています。

核のまわりは組織が必要で、組織は常に活発に動いていなければ核は死んでしまいます。この組織作りに一生をかけてきたのが夫です。

私もこの考え方には賛成でしたが、長い運動の中で、いや運動

だからこそ矛盾と悩みは次々生まれました。

夫は運動家としてありがちな夫婦親子の情よりも、組織への働きがけを常に優先しました。

そのことはわかっていましても、四人の子を生み育てる中で、子供達がお父さんを必要とする時も、是非いて欲しいと思うときも、朝家を出たら夜まで帰らない夫に随分淋しい思いや、悲しい思いを数え切れない程しました。四人の子供達の長い子育ての間、淋しい思いをさせないために母にもいろいろ助けてもらいました。

そして最も弱い立場に追いやられている人達が少しでも幸せになるために、この運動を続けていかなければと思い直しては、今日まで来たように思います。

夫は永遠のテーマである『住民の人たちと共に医療の民主化を』と、誰もが挑戦し、誰も実現できずにいるこのテーマに、がむしゃらに歩いてきました。そんな夫に連れ添って五十年、この運動はこれからも続くと思いますが、まだまだ道遠しです（早川ゆき、2002 p260-261）。」

早川は、二〇〇二年五月をもって、白衣を脱いだ。

白衣は、医師としてのシンボルである。そのシンボルを脱いだのだ。「公設民営」の美山診療所の所長職を退いたのをきっかけに、「白衣は着ない、検査もしない、注射も打たない、投薬もしない」と、早川は決心する。それは、医療技術者としての事実上の引退宣言ともとれなくもない。

では、どうするのか。早川は言う。これからは「（八十才）でこその医療」をするのだと。では、「（八十才でこそ）の医療」とは、いったいどんな医療なのであろうか？

「八十でこそできる医療って何だろうって考えたら、いっさいもたない、白衣も脱ぎ、薬も置かず、検査もせずに、裸のままひとりひとりの患者さんに会って、ただ、じーっと患者さんの訴えを聴くということかな。苦悩を聴くというね、この原点に戻ることでしょうね[12]。」

「八十でこそできる医療って何かなあって考えたときね、そうやって気がついたのはね、白衣を脱ぐことなんです。白衣を着てね、医者です、あなたは患者さんですって、そういう医療じゃなくてね、もう白衣を脱いじゃったらねもうただの人。もう裸の人間と、裸になられる人間とが一緒の立場になって医療をする。それができるのは八十になってからじゃないかなあと思ってね[13]。」

「（八十才）でこその医療」。それは、京都西陣で五十年、美山で七年の月日を地域医療に注いできた早川の、医師としての最後のステージとなるだろう。

早川は、「八十でこそ、八十才になったからこそできる医療」を、「患者の話にただ耳をすまし、聴くこと」だとした。そして、かつて白衣をまとい、往診鞄をもち、看護師を伴って訪ねた地元・西陣の

町を、今は、白衣も着ず、往診鞄ももたず、妻を伴い訪問して回り、寝たきりの高齢者の様子をうかがい、話を聴いて回っている。

美山診療所退職と同時に自宅に開設した「わらじ医者よろず相談所」に診療器具はなく、あるのは、電話とファックスのみである。ラジオでの告知や口コミで寄せられる人生相談や医療相談に、早川は無料で応対し、その相談内容をカルテに書き込んでいく。

「一人の患者さんの悩みをみんなが寄ってたかって聴こうとする。解決してあげるというのではなく、共に苦しむ、共に悩む、共に悲しむ、共に喜ぶというそういう仲間がいっぱい増えて来れば、突破口になると思う[14]。」

当初、ワイド番組の枠内で制作されていたラジオ『早川一光のばんざい人間』は、パーソナリティ早川の「祭司性」「カリスマ性」をよりシンボライズさせようと、スタジオに少数の聴取者に参加してもらったことを契機に、意図せざる結果として、スタジオ参加型番組へと変貌をとげた。そこには、祭司・早川の「住民参加」の基本理念が息づいていることは言うまでもない。医療に、住民が参加する。そして、ラジオにも、住民が参加する。早川にとっては、五十七年間往診してまわった地域も、七年間通った美山町も、ラジオスタジオも、ラジオによる放送空間も、臨床の場なのである。人々の「声」を聴き、そして、その「声」によりそい、対話を活性化させていくことが早川にとっての医療なのだとすれば、それは、今、ラジオが期待されているコミュニケーションのありようと重なり合う。そこには、三十年前に構想された「コミュニティのひとびとにマイクを解放し、人々の間の対話を活性化していく“対話の広場”としての機能（日本民間放送連盟、1971）」の可能性があるのではないだろうか。

白衣を脱いだ早川の医療は、人間関係が希薄になった地域社会のなかで、人と人との関係を紡いでいこうとする試みでもある。

「最期は早川先生に看取ってもらいたい」という地域の寝たきりの高齢者も、「わらじ医者よろず相談所」に電話をかけてくる人も、ラジオスタジオにやってくる人も、そして、ラジオを聴いている人も、求めているのは、そうしたコミュニケーションなのではないだろうか。

早川にとっては、聴取者がラジオを聴くこと、ラジオに参加することは、「広い意味での医療」である。ラジオに参加して、楽しみ、対話をし、そして変わっていくプロセスを早川は「それもひとつの医療」なのだという。彼にとっては、ラジオスタジオもラジオの空間も、診療所なのだ。

「（八十才）でこその医療」「聴くことの医療」を提唱する今こそ、聴取者が参加するラジオのコミュニケーションと、早川の医療はこれまで以上にひびきあうのである。

4. ラジオスタジオの“対話の広場”としての可能性

津金澤聡広は、ラジオの生・ワイド化、パーソナリティ化が一般化した一九六八年に「ラジオ対テレビの問題はメディア機能それ自体にあるのではなくそこに盛り込まれる内容であり、情報の質にあると考えるべきではなかろうか。」と問いかけ、ラジオの属性および機能をどのように実質的に生かしつつ表現しうるかという方向で追求すべきだと述べている。つまり、「活動しつつある民衆の声と心をとらえてほしい。テレビの前のおざなりの声ではなく、人々のじかの希望・喜び・悲しみ・憤り・それらすべてをラジオにのせてほしい。テレビカメラが映しきれないさまざまな状況を伝えてほしい。」のだと。そして、戦後のラジオの基本理念が、「民主化ラジオ」「民衆のラジオ」であったのに、ラジオからは民衆の声が消えてゆき、有名無名の芸能人の声ばかりきこえるようになったことを、嘆いてみせてもいた（津金澤、1968, 1982 p38-47）。

津金澤が述べた「民衆の声と心をとらえ」うるラジオのメディアとしての可能性と、忘れ去られてしまっていた「民衆のラジオ」が、生涯を「住民参加」の医療に捧げた医師・早川がラジオパーソナリティをつとめることによって、よみがえりつつある。

『早川一光のばんざい人間』では、生放送で、参加者たちがニュースにコメントし、質問し、意見もする。最初は素人の稚拙さがめだったコメントも回を重ねるごとに人生の歴史があらわれるような味わいのあるものに変化しつつある。番組スタッフも、参加者たちの旺盛な「発言」への欲求には驚くばかりである。

早川は、「みんなが参加し、楽しむこと、それは広い意味での医療」なのだという。「スタジオに来るようになって皆さんが変わっていくのが楽しみ、それも医療なのだ[15]。」と。

ラジオスタジオは、早川の臨床の場であり、「住民参加」の医療と「住民参加」のラジオが重なり合う空間なのである。

最後に、“対話の広場”としての『早川一光のばんざい人間』が今、直面しようとしている問題点を、四点述べておきたい。

第一に、だれでも、いつからでも参加できるということには、ある種の危険がつきまとう。本稿で述べた事例の『早川一光のばんざい人間』の特異性とは「だれでも、いつでも」にあるのだが、一般に放送局といった機関で「だれでも、いつでも入館できる」ことはありえない。

事実、NHK京都支局での暴漢たてこもり事件以来、KBS京都も警備を強化した経緯があり、『早川一光のばんざい人間』のスタジオ参加のみ「だれでも参加できる」を公言することが問題となった。結果、常連参加者には、番組で発行している受講票を受付に提示することで入館が許可されるようにし、初めて訪れる人には、できるだけ前もって番組あてに電話をして申し込むようお願いするという措置がとられるようになった。生放送に見知らぬ人が出入りするという状態は、放送局にとっては危険きわまりない状態であり、防犯体制の危機管理に対する姿勢が問われる事態にもなりかねない。放

送局として危機管理が問われることとなるこの問題は、未解決のままである。

第二に、『早川一光のばんざい人間』の評価の問題をあげておきたい。商業放送の評価は、聴取率に集約される。どれほど多くの人に聴かれているのかが評価の対象となるのである。しかし、高齢者をターゲットとしている以上、聴取率は伸び悩む。商業放送局にとっては、聴取率の高さは何より重要である。聴取率が高いと、広告の出稿が増えるからだ。それならば、聴取率もとれず、スポンサーもつかないという状態で、なぜ、KBS京都は『早川一光のばんざい人間』を継続してきたのだろうか。

その大きな理由のひとつに、民間放送連盟賞と放送批評家懇談会のギャラクシー賞の受賞という、放送業界内での評価の高さがあげられるであろう。一九九九年のダブル受賞と同時に社長賞も贈られ、番組内容に関する内外からの評価は高い。また、テレビ、雑誌、新聞など多メディアからの取材も多く、番組の発信姿勢には早川の医療活動とともに高い関心が寄せられていることに、放送局としても自覚的なのであろう。地域貢献の名のもと、利益が上がらない番組をいつまで続けられるのか、放送局の度量が問われることになる。

第三に、早川の体力的限界の問題があげられる。早川は、まもなく八十才である。2時間立ちっぱなしの生放送は、本人にとっては辛いのではないか。最近では、本人自身から体調の不良も時々聞かれるようになった。いずれの日か、体力的限界理由で降板はある。その時、十数年かけてできあがった聴取者たちの“対話の広場”である公開スタジオを維持できるのかどうか。早川の降板とともに“対話の広場”も解散させてしまうのか。毎週、スタジオに通うのを楽しみにしている聴取者達を今後どうするのか。これも、放送局の度量が問われる問題となるであろう。

ちなみに、早川の後継者になりうる人材はまだ、考えられていない。

第四に、「住民参加」のありかたへの疑問である。早川は一貫して「医療は患者が主人公」「ラジオは聴取者が参加すべき」なのだと主張してきた。しかし、国民皆保険運動や、住民出資による診療所設立運動の先頭に立ってきた早川が七十才をすぎてから携わった美山町の診療所運営は、「公設民営」の理念が理想通りに機能したとはいえない。

ラジオはどうであろうか。早川が説き、聴取者が聴き入るという図式は、ともすれば早川の聴取者への啓蒙とはとれないだろうか。現状では、「勉強になるからスタジオにくる」とう参加者が多いのも事実である。

コミュニティとは自発的に人々の生活の中から発生するものだとするなら、早川が先導したこの集団がコミュニティと言えるのか、疑問が残らなくはない。しかし、早川によって蒔かれ、芽吹いたものをどのように育てていくかは、聴取者自身の主体性にかかっているともいえよう。すでにコミュニティは生成されているのである。早川は、決してオピニオンリーダーであり続けたいのではない[16]。「聴取者が主人公」であることをひたすら説き、そして、主体的な聴

取者たちのすがたが立ち現れたとき、伴走者でありたいのだ。早川に先導されたとはいえ、一度生成したラジオのコミュニティを今後、どのように成長させていくことができるのかが問われている。

以上、四点の問題点を抱えながらも、毎週土曜日の朝には、『早川一光のばんざい人間』に、いつものように聴取者が集う。

その背景には、彼らの「居場所」探しともいうべき集団への帰属欲求や、他者とのコミュニケーションへの欲求には、現在の地域のコミュニティが希薄になっているという問題や、高齢者がかかえている孤独の問題とも連なっているといえるだろう。参加者にとって、番組参加は「生き甲斐」であったり、「生活のはり」になっているのだ。今や、番組を媒介として、人々は、趣味の会や、ボランティアの輪をひろげるなど、番組の外での人間関係をも作っている。このようなラジオによる縁は、都合が悪ければいつでもやめることができる、地縁や血縁とは違う、ゆるやかな参加が可能な選択縁[17]でもある。

「パーソナリティが早川一光でなくなったら、もう参加しませんか?」と筆者の問いに、七十代の女性参加者は、「来ます。」と答えた。

『早川一光のばんざい人間』のラジオコミュニティは、スタジオ内だけではない。スタジオ内で繰り広げられるコミュニティでの会話を、まるで自らも参加しているように楽しんでいる多くの聴取者が存在することを忘れてはならない。スタジオ内でコミュニティが形成されると同時に、ラジオスタジオそれ自身がメディアとなってマクルーハンのいうヴァーチャルな「地方的地域共同体」をも末広がりに形成していく。しかし、聴取者にとっても、そのラジオスタジオは「いつでも、だれでも」実際に参加できる空間なのであり、"対話"が可能な広場でもある。常連参加者だった人が病床で、または在宅で毎週の放送を楽しみにしている例も多い。「機会があれば行ってみよう」と思いつつ放送を聴いている聴取者にとっても、そこは、今までにない"対話の広場"となるのではないだろうか。

乗り越えなければならない課題を見すごすわけにはいくまいが、「住民参加」にこだわり続けた医師のラジオパーソナリティによって掘り起こされたのは、ラジオによってコミュニティが形成され、そしてラジオが"対話の広場"となりうる可能性なのである。

註

(1) 早川一光、二〇〇一年十月七日、パーソナルインタビュー。

(2)『上方芸能』では、AMラジオを「おとな文化」として「特集効く聴くラジオ―おとな文化の元気―」特集を組んだ。ゆっくりじっくりと暮らしの充実感を味わう、優れた文化が今こそ求められているとし、放送メディアのなかでは、放送のなかでも最も長い歴史をもつAMラジオがその役割を果たすとした。近年は『ラジオ深夜便』をはじめ、AMラジオが中高年世代のメディアとして注目されている。

(3) プロデューサー、ディレクター高田正人(京都放送ラジオ制作部)、二〇〇一年十月七日、パーソナルインタビュー。なお、ディレクターは、十五年間に人事異動などで四名、五回交代。

(4) 現在もなお、生・ワイド・パーソナリティ番組におけるラジオパ

ーソナリティは男性、アシスタントは女性という性別役割分業がみられる。詳しくは、（北出、2002a）、（北出、2002b）を参照されたい。

（5）高田正人、2001年、前掲資料。

（6）社団法人「呆け老人をかかえる家族の会」は、一九八〇年、京都で発足した。現在では全国三九都道府県に支部がある。呆けに関わる当事者を中心とした全国的で、唯一の民間団体。早川は創設に携わり、現在は顧問である。

（7）秋津千津子、二〇〇二年六月二二日、パーソナルインタビュー。

（8）中村ふみ、二〇〇二年六月二二日、パーソナルインタビュー。

（9）宮内正太郎、二〇〇二年六月二九日、パーソナルインタビュー。

（10）渋谷三郎、二〇〇二年十一月三十日、パーソナルインタビュー。

（11）早川一光、二〇〇一年十月七日、前掲資料。

（12）早川一光、二〇〇二年七月二七日、京都放送ラジオ『早川一光のばんざい人間』「びっくり仰天講座」生放送から。

（13）早川一光、二〇〇二年十一月十七日、東京放送テレビ『報道特集』から。

（14）早川一光、二〇〇二年十一月十七日、前掲資料。

（15）早川一光、二〇〇一年十月七日、前掲資料。

（16）作家で朝のラジオパーソナリティとなった利根川裕は、一九七〇年代にすでに「電波情報媒体は、現実を増幅拡大させる点において、その有効性を見事に発揮するが、現実とのその密着性の強さに比例して、現実への批判は弱まらざるをえないようである」とし、ラジオパーソナリティの役割をオピニオンリーダーではなく、「ある意見、ある主張、ある判断を、日常的レベルで聴取者と分かち合い、共感しあい、かくて一種の共同体親近性をもちあうことのほうに、より自然な役割があるのではないか。」と提案している（利根川、1977、p101-112）。

（17）上野千鶴子は、このような加入・脱退が自由で拘束性のない人間関係を「選択縁」としている（上野、1994、p285）。ラジオスタジオでの人間関係も、ラジオによる「選択縁」であり、「都市化社会が生み出した新しい人間関係」でもある。

参考文献

上野千鶴子、1994、『近代家族の成立と終焉』、岩波書店。

香取淳子、2000、『老いとメディア』北樹出版。

北出真紀恵、2002a、「地域をつなぐ『声』～音響メディアにおける『声』とジェンダーの変遷～」『年報人間科学』23号。

2002b、「ラジオにおける女性ラジオパーソナリティの役割～女性ラジオパーソナリティへのインタビュー調査から～」『マス・コミュニケーション研究』61号。

清原慶子、1983、「地域メディアの機能と展開」『地域メディア』所収、日本評論社。

軍司貞則、1998、『ラジオパーソナリティ～22人のカリスマ』扶桑社。

津金澤聡広、1981、「ラジオの文化状況とディスクジョッキー」『上方芸能』72号。

1968、「ラジオの社会学再考」『ラジオコマーシャル』25号、初出。

1982、『マス・メディアの社会学』、世界思想社所収。

利根川祐、1977、「ラジオパーソナリティ論」『放送学研究』29号。

中野収、1997、『メディア人間　コミュニケーション革命の構造』勁草書房。

日本民間放送連盟編、1965、『ラジオ白書』岩崎放送出版社。

1971、『コミュニティ・ステーションとしてのラジオ』。

1981、『民間放送三十年史』。

早川ゆき、2002、『わらじ医者の女房』、ふたば書房。

林香里、1996、「ローカルラジオの可能性と限界－ドイツにおけるもう一つのニューメディア」、『マス・コミュニケーション研究』48号。

藤久ミネ、1990、「ラジオの諸問題」、『テレビ放送を考える』所収、ミネルヴァ書房。

1999、「ラジオ放送の現在と活性化への課題」、『テレビ放送への提言』所収、ミネルヴァ書房。

マッキーヴァー、1917、中久郎・松本通治監訳、1975『コミュニティ』、ミネルヴァ書房。

マクルーハン・M、1964、栗原祐・河本仲聖訳、1987『メディア論　人間の拡張の諸相』みすず書房。

参考資料

朝日新聞、「探見劇場」、一九九九年六月二五日。

京都新聞、「高齢化社会を考えよう」、一九八七年九月二八日。

東京放送テレビ、『報道特集』、二〇〇二年十一月十七日放送分。

「特集　ラジオ文化と関西のディスクジョッキー」、1981、『上方芸能』72号。

「特集　現状のラジオ文化－危機感の喪失と胚胎」、1991、『上方芸能』107号。

「特集　効く聴くラジオ～おとな文化の元気」、2002、『上方芸能』143号。

秋津千津子、二〇〇二年六月二二日、パーソナルインタビュー。

渋谷三郎、二〇〇二年十一月三十日、パーソナルインタビュー。

高田正人、二〇〇一年十月七日、パーソナルインタビュー。

中村ふみ、二〇〇二年六月二二日、パーソナルインタビュー。

早川一光、二〇〇一年十月七日、パーソナルインタビュー。

宮内正太郎、二〇〇二年六月二九日、パーソナルインタビュー。

Radio Studio as Community : A Case study of "Hayakawa Ikko no Banzai Ningen" at KBS Radio.

KITADE Makie

This paper is intended as an investigation of the possibility of local radio having a function as "a forum" for a dialogue, and is a case study of "Hayakawa Ikko no Banzai Ningen" at KBS radio from my field work as another radio personality of this program, since this liveshow started. This program is an interesting case where about 40 listeners come to the radio studio and take part in the live program on air every saturday morning. A community has been formed in the radio studio. The radio personality Hayakawa Ikko will soon be 80 years old, he is a medical doctor and well-known as a doctor who goes to see his patients in his local area. At first this program was made in the normal style. Directive to feature Hayakawa's activity as a lecturer on the live stage brougt about the change to what it is now. It produced an effect the other to program's staff's intentions. Hayakawa has insisted on civil participation of both medical care and radio, and the listeners' partcipating in the program is an accurate reflection of his way of thinking. The old doctor has decided not to wear his white's coat any more. And he said being a doctor for 80years is listening to patients and to discuss. Now his way of medical care and his thinking about radio will have a more profound impact than before. Not only Hayakawa has changed but listeners and "a forum" that they take part in.

I point out 4 difficulties of "Hayakawa Ikko no Banzai Ningen", nevertheless we can see the possibility for a dialogue in "a forum" there.

Key Words

radio, community, medical care, civil participation, "forum" for dialogue